第５Ａ分科会　研究課題「教職員の専門性に関する課題」

研究主題「小中一貫教育を推進していくための教頭の関わり」

～ ふるさと教育への関わりを中心にして ～

都城支会（五十市・西地区）

1　主題設定の理由

都城市では「小学校と中学校が一貫した取組を行うことを通して、『都城学校教育ビジョン』に示す『すぐれた知性をもち心豊かでたくましい、ふるさと都城を愛する人間力あふれた児童生徒の育成』を図る。」ことを目的に、１７のブロック毎にそれぞれの実践を重ねている。

本地区も五十市ブロック（五十市中、五十市小、今町小）と西ブロック（西中、西小、明和小）に分かれて、それぞれの取組を行っている。

しかしながら、それぞれの取組について話題になることや情報交換することは少ない。また、合同研修会等の実務は、教務主任や研究主任が担っており、教頭の関わりは高いとは言えない。

また、「地域とともにある学校」をめざして市内の各小中学校に設置された学校運営協議会と小中一貫教育とのつながりが薄いようにも感じられる。

そこで、本地区では、小中一貫教育のビジョンの柱である「ふるさと教育」と学校運営協議会とのつながりを明確なものにするために、平成３０年度より教頭の果たすべき役割を見直すと共に小中一貫教育を更に深めていくために本主題を設定した。

2　研究のねらい

五十市ブロックと西ブロックの小中一貫教育における「ふるさと教育」の取組とその課題を整理し、都城市の目指す教育ビジョンに迫るために、教頭としてどのように働きかけ、関わればよいかを研究する。

3　研究の概要

(1) 研究の内容

① 教師のふるさと教育力を高めるための取組（五十市ブロック）

② 地域の人材・素材を有効活用するための取組（西ブロック）

(2) 研究の実際

① 教師のふるさと教育力を高めるための取組（五十市ブロック）

ア　共通実践事項

ふるさと教育

【地域素材の充実】

◎　地域行事への積極的な参加

（五十市地区まちづくり協議会主催事業）

・五十市子ども音楽祭　・歩こう会

・子ども料理教室　・俵踊り

○　ボランティア活動の充実

●　地域素材・人材の活用

（俵踊りの練習の様子）

イ　史跡めぐり

市の文化財課に依頼して、小中学校教職員で、五十市地区に残る文化財を見学した。車で１時間半ほどかかるコースは以下の通りである。

五十市地区公民館 → 都城歴史資料館 → 宮尾・立野遺跡 → 今町一里塚 → 楠見家 → 愛宕神社（仁王像）→ 元服坂 → 五十市地区公民館

② 地域の人材・素材を有効活用するための取組（西ブロック）

ア　共通実践事項

ふるさと教育
◎● 地域の人材・素材の活用 地域人材、地域素材を生かした教育活動の推進

イ　学習支援コーディネーターの委嘱

第１回合同学校運営協議会の場で横市地区まちづくり協議会の事務局長である坂元三郎氏を学習支援コーディネーターとして委嘱した。

ウ　コーディネーターを介して紹介された学習支援ボランティアの活動例

- 親子でなわないにチャレンジ（小１・生活科）
- 昔話の読み聞かせと手遊び（小２・生活科）
- 押し花の栞・キーホルダー・エコクラフト作り等（小３・総合的な学習）
- 昔語り（小３・総合的な学習）
- ねったぼ作り（小３・総合的な学習）
- 家庭科の縫い物（小５と小６・家庭科）
- 平和について考える「横市地区の戦前・戦後の講話」（小６・総合的な学習）
- 図書室の本の修繕・栞作り（小全）
- 職業講話（中１・総合的な学習）
- 面接練習（中３・総合的な学習）

（ねったぼ作りの様子）

4　研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

①　地域の史跡を知ることができた。

②　小中学校の職員がともに研修を行うことで、情報交換ができるようになった。

③　地域の行事に参加する児童生徒の様子について、情報を共有できた。

④　まちづくり協議会主催事業の運営を通して、教頭がパイプ役となり地域人材の活用が図られるようになった。

（以上　五十市地区）

⑤　学校支援コーディネーターに積極的に関わっていただき、各学年の地域学習における学習支援ボランティア活動が充実した。

⑥　農作物を育てる畑地及び苗の提供、校外学習時における交通要所での立番交通安全指導など、様々な要望に応えていただいた。

⑦　教頭として、各学年・学級担当とコーディネーターの仲介役を務めることで、ふるさと教育の充実に貢献することができた。

（以上　西地区）

(2) 今後の課題

①　地域人材の高齢化に伴い、新たな人材が必要となってきているものもあるため、地域とともに対策を考えていく必要がある。

②　教頭自身が、どんな地域人材・素材があるのか、まず地域を知ることが必要である。また、学習支援コーディネーターや地域の方々との連携を深めるためにも、進んで地域行事に参加し情報交換しながら、ネットワークを広めることが必要である。

③　学校運営協議会の事務局として果たす教頭の役割を認識し、学校運営協議会の組織を実効的に機能させるために、学校運営の基本方針を理解してもらい、保護者・地域の協力のもと、一丸となって進めていく必要がある。

④　小学校単独でなく、中学校区で、小中９年間かけて、人間力あふれた児童生徒を育成していくことが求められる。そのためには、教頭が脇役でなく、一層リーダーシップを発揮して、各小中学校の教育活動を牽引していく必要がある。

第５Ｂ分科会　研究課題「教職員の専門性に関する課題」

研究主題「コミュニティ・スクール推進における教頭の関わり方」

都城支会　山之口・高城地区（小学校）

1　主題設定の理由

コミュニティ・スクールは、校長が作成する学校運営の基本方針を承認したり、学校運営について教育委員会または校長に意見を述べたりすることができる機能があり、学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組み、「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組みである。

本地区の小・中学校９校でも、それぞれの学校や地域の実態に即した形でコミュニティ・スクールの取組を行っている。その推進にあたっては、学校運営協議会の意見をどのように学校運営に活かすかということが重要であり、その調整役として教頭の果たす役割も大きい。

そこで、本地区では、コミュニティ・スクールの推進にあたり、学校運営協議会の意見を学校運営にどのように活かすか、また、そのために教頭がどのように関わっていけばよいかを追究することが重要であると考え、本主題を設定した。

2　研究のねらい

コミュニティ・スクールの推進にあたり、学校運営協議会の意見を学校運営にどのように活かすか、また、そのために教頭がどのように関わっていけばよいかを追究する。

3　研究の概要と成果

(1)　学校支援活動において

【麓小の取組】

麓小学校は、多くの行事において地域や保護者の多大な協力をいただいている。今年度も新たな地域の人材確保と協力体制の強化を図るために、拡大学校運営協議会（学校運営協議会委員・民生委員児童委員・地区自治公民館長）を開き、地域全家庭に令和２年度の学校支援ボランティアを募るための協力を依頼した。

そして、これまでの学校支援ボランティアと新たに登録された方々を集約し、学習支援・環境整備等の学校支援活動を充実させた。また、学校・家庭・地域が目標を共有しながら共に活動していくことで「地域とともにある学校」として、連携・協働を深めた。

【富吉小の取組】

学校支援ボランティア活動は、地域コーディネーターの方が要となり、学力定着にかかわる朝の学習時間における講師や、裁縫や調理、栽培等の授業における学習補助等それぞれの得意分野を生かした様々な分野で協力をいただいている。年度はじめ活動の見通しを立てるとともに、個々の充実を図る目的で学校支援ボランティア会議を実施し意見交換を行った。

「教頭としての関わり」

校長のリーダーシップのもと、地域の人材や団体、関係機関との連絡調整を行った。また、学校支援ボランティアと地域連携担当教職員とをつなぐ役割として、地域や保護者の声を聞きながら連携を図った。「地域とともにある学校」として、連携・協働を図ることができた。

(2)　地域に開かれた教育課程において

【山之口小の取組】

「児童に生きる力を培うためには、自然体験を多くもつことが必要である。山之口には、豊かな自然とスタッフが揃っているので、地元の力を十分活用してほしい。」という学校運営協議会委員の意見と「地域のよさを学び、心豊かで創造的な、心身ともにたくましい児童の育成につなげたい。」という学校のニーズを調整し、教育課程に組み込んだ。５月には、６年生が総合的な学習の時間に地域の自然や歴史、文化等を学ぶ校外学習の一環として、山之口町の山中に残る「薩摩古道」を地域のボランティアガイド支援のもとに歩いた。また、１０月には、山之口地区小学校３校の４年生が合同で青井岳遠足を行い、同じく地域のボランティアガイドに支援をお願いし、地域の自然にふれあう活動を行った。

【高城小の取組】

学校運営協議会において提案された「学校の行事に参加したい保護者や地域の方は多いので、必要とあれば協力していく。」という意見を受け、本校の地域人材の活用について見直しを行い、今年度は、特にキャリア教育について改善を図ることにした。

夏休み前から、計画作成、児童の希望集約、職業決定、講師選定を行った。そして、１０月２５日のオープンスクールにおいて６人の保護者を講師として招いてキャリア教育を実施した。どの児童も熱心に講師の説明を聞いたり、質問をしたりする姿が見られた。また、講師や参観した保護者の方からも「すばらしい取組だったので来年も実施してほしい。」という感想が多く出された。

「教頭としての関わり」

学校運営協議会からは、「人材活用」「地域施設の活用」など多くの意見があり、それを教職員に紹介したり、職員会や関係校務分掌部で協議したりすることで、教育課程の改善を図っていくように努めている。

また、教職員の要望をまとめ、地域に発信している。そのことにより、必要とする地域人材の確保、体制づくり、地域人材の効率的な活用につながっている。

(3) 地域貢献活動において

【石山小の取組】

① 「ふれあいの日」における花植え

児童と地域の高齢者の方々とのふれあいを目的として、５・６年生と高齢者が一緒に学校の坂の下の花壇に花を植えた。花の苗は第 10 区自治公民館長が準備をしてくださった。夏を迎える頃にはきれいな花を咲かせ、道行く人の目を楽しませている。

② 「リメンバー石山」における石山観音寺の清掃活動及びコスモスの種まき

毎年 7 月に、「石山観音寺の清掃活動」と「片前地区の休耕田へのコスモスの種まき」の活動を行っている。石山観音寺の本堂の周りを清掃し、住職の講話を聞くというものである。また、片前地区の３つの休耕田に児童がコスモスの種まきを行っている。秋には満開になったコスモスが道行く人の目を楽しませている。

【有水小・中の取組】

① 学校から地域に向けた活動

本地区は、少子高齢化が顕著であり、地域の活性化や地域に貢献できる取組が地域の願いとして学校に求められている。そこで、「家具固定活動」や「クリスマス会」など、学校から地域に向けた取組を行っている。

「教頭としての関わり」

学校運営協議会や地域の団体と連携・協力する中で、地域の思いや願いを把握し、活動を進めるようにした。また、活動の内容を教職員や児童生徒にも周知し、校内で組織的な展開が図られるようにした。

今後も地域の人材をコーディネートする際は学校運営協議会委員を窓口としてお願いし、地域の人材を積極的に活用していかなければならない。

4 今後の課題

○ 学校運営協議会の仕組みや運営について、教職員や児童生徒、保護者、地域住民に十分に周知し、活性化を図る必要がある。

○ 学校の教育活動に対する地域住民の願いや期待を教職員が十分理解して業務にあたるように工夫する必要がある。

○ 地域の様々な団体と情報交換を行い、地域コーディネーターとして活躍してもらえるように、地域をよく知る人材を確保する必要がある。

○ 事務職員にも適切な役割をお願いして、役割分担を推進し、組織的な活動が展開できるような手立てをとる必要がある。

第５Ｂ分科会　研究課題「教職員の専門性に関する課題」
研究主題「生徒、保護者･地域から信頼される教職員集団となるための教頭の役割」

宮　崎　支　会

1　主題設定の理由

宮崎県教育委員会が作成した「服務規律等マニュアル～信頼される教職員を目指して～」や「不祥事発生の背景・原因と防止対策」には、教職員の不祥事による社会的な信頼喪失への危機感と、その防止策の必要性が指摘されている。つまり、学校において教職員が不祥事を起こすことは、教育への信頼低下につながり、学校教育の危機的状況を招くことになると言える。

この課題を解決するためには、根本となる信頼関係の構築が重要であり、生徒、保護者・地域から信頼される教職員集団となる必要がある。

そこで、よりよい信頼関係作りのための具体的な手立てを明らかにし、そのための教頭の役割を研究することで、教職員のコンプライアンス意識の向上につなげようと考え、本主題を設定した。

2　研究のねらい

教職員の実態や意識を調査することで、生徒や保護者・地域、同僚の教職員と信頼関係を築くための方策を探究し、信頼される教職員集団とするための教頭の役割について明確にする。

3　研究の概要と成果

(1)　研究内容

ア　信頼関係を構築するための調査及び方策

イ　信頼関係を構築するための教職員の取組と意識調査

ウ　教職員意識調査の分析・考察

(2)　研究の実際

ア　信頼関係を構築するための調査及び方策

宮崎市内の６中学校で教職員に事前調査を実施し、生徒、保護者・地域、同僚との関わりで心がけていることを集約し、それぞれのポイントを次のようにまとめた。

【関わりのポイント】
○　生徒との関わり
コミュニケーション、称賛、誠実、毅然とした態度
○　保護者･地域との関わり
コミュニケーション、傾聴、情報共有、感謝の心
○　同僚との関わり
コミュニケーション、報連相、チーム力、感謝

イ　信頼関係を構築するための教職員の取組と意識調査

研究担当６中学校で生徒、保護者・地域、同僚との「関わりのポイント」を毎年度当初に配付し、「関わりのポイント」を意識した実践を心がけるように伝達した。そして、教職員に後日アンケートを実施（令和元年・２年度）し、教職員の実態調査を行った。次の表は、その結果である。

Ａ：よくやっている　　Ｂ：心がけている
Ｃ：あまりやっていない　　Ｄ：やっていない

＜令和元年度＞　（数値は%）

項目	実践内容	A	B	C	D	重要度
生徒との関わり	コミュニケーション	38	60	2	0	21.7
	称賛	22	70	8	0	3.6
	誠実	54	46	0	0	8.3
	毅然とした態度	44	54	2	0	6.9
保護者・地域との関わり	コミュニケーション	26	54	20	0	3.2
	傾聴	43	54	3	0	15.9
	情報共有	28	52	13	7	1.1
同僚との関わり	コミュニケーション	39	57	4	0	10.8
	報連相	53	45	2	0	17.7
	チーム力	52	46	1	1	8.3
	感謝	47	51	2	0	2.5

＜令和２年度＞　（数値は%）

項目	実践内容	A	B	C	D	重要度
生徒との関わり	コミュニケーション	35	65	0	0	14.8
	称賛	25	70	5	0	3.6
	誠実	54	46	0	0	11.2
	毅然とした態度	48	50	2	0	3.2
保護者・地域との関わり	コミュニケーション	15	72	13	0	6.8
	傾聴	49	49	2	0	24.4
	情報共有	20	56	19	5	2.4
同僚との関わり	コミュニケーション	36	62	2	0	10.0
	報連相	56	43	1	0	16.4
	チーム力	50	49	1	1	4.4
	感謝	43	56	1	0	2.8

ウ　教職員意識調査の分析・考察

複数年度の調査のため、回答した教職員の異動があったが、６中学校の教職員の取組状況は、どの学校もほぼ同じ傾向であり、調査結果から次のような変容がみられるようになった。

（ア）調査項目・実践内容からの分析

【生徒との関わり】

○　生徒への声かけ等のコミュニケーションや生徒との適切な距離感を保つ意識や取組は、前年度同様高い。

○　ほめることを心がけるなど生徒への称賛は、前年度より取組の状況がよくなっている。

【保護者・地域との関わり】

○　保護者等へ情報を報告することやしっかり話を聞く姿勢作りは、前年度以上に取り組んでいる。

●　学校からの情報発信については、職員により取組に差が見られる。

【同僚との関わり】

○　同僚との関わり方については、報・連・相や情報共有についての意識が高まっている。

○　礼儀や感謝の気持ちを伝えるなどお互いのコミュニケーションの意識が高まるなど信頼関係が深まってきている。

（イ）信頼関係を深めることができた具体的事例

【生徒との関わり】

○　目標やあるべき姿を示し、きちんとできていることをほめることで、次のやる気（意欲）や笑顔が増えた。

○　生徒を直接ほめるより、担任や部活動顧問を通して伝えることで、直接伝えることより効果があるように感じた。

【保護者・地域との関わり】

○　保護者等の思いをしっかり把握してから、教師の思いや考えを伝えていくことで、信頼関係を深めていくことができた。

○　遮ることなく話を聞き、問題点を整理して対応の方針を決めることで安心された。

【同僚との関わり】

○　常に笑顔でコミュニケーションをとったり、感謝の気持ちを伝えたりすることで、職場の雰囲気がよくなった。

○　日常の生徒の様子や変容や、素早い対応が必要な生徒指導に関わることなど、積極的に連携を図っている。

（ウ）実践内容に対する重要度に関する意識

【生徒】：コミュニケーションを重視しているが、称賛することはやや苦手である。

【保護者・地域】：傾聴することを重視しているが、情報を発信する取組に差が見られる。

【同僚】：報・連・相を重視しているが、感謝の気持ちを伝えることが少ない。

(3)　研究の成果

意識調査の結果から、教職員がどのようなことを考えたり、感じたりしているのかについて、その傾向を知ることで、生徒、保護者や地域、同僚との信頼関係を築くための「関わりのポイント」や具体的な方策をまとめることができた。そして、その結果を同僚の教職員に示すことで、今後の学校としての取組の方向性を示すことができた。

また、教頭として、生徒、保護者や地域、同僚の教職員との関係について具体的なアドバイスの方向性を明確にすることができた。

【生徒との関わりに関するアドバイス】

○　生徒の様子を観察することを通して、コミュニケーションにつなげていく。

○　生徒との約束事を守ったり、生徒の取組を称賛したりすることで、良好な信頼関係づくりができる。

【保護者・地域との関わりに関するアドバイス】

○　家庭等での状況や困り感をじっくり傾聴する姿勢が大切である。

○　学校での出来事など積極的な情報発信が信頼関係につながる。

【同僚との関わりに関するアドバイス】

○　教職員間の報・連・相をしっかり行い、情報を共有する。

○　教職員間での取組に差が出ないように、チームとしての共通理解のもと、共通実践にあたる。

4　今後の課題

研究のねらいとしての教頭の役割については、意識調査をもとに成果や課題を教職員に示し、学校全体でよりよい信頼関係づくりを目指す雰囲気を醸成する必要がある。そのために、信頼関係を深めることができた多くの実践事例を教職員に示すことで、生徒、保護者、地域から信頼される教職員集団を作り上げていきたい。

また、本結果を参考に計画的に研修を実施したり、日々の実践に対する指導助言を心掛けたりすることで、教職員が組織的に自分の役割を果たせるように指導することが大切である。そして、教頭として、教職員が生徒、保護者、地域に信頼されるための職場環境づくりに努めていきたい。

あ　と　が　き

宮崎県公立小中学校教頭会
研　　究　　部

令和２年度は、「新型コロナウイルス」感染拡大による全国一斉の臨時休業措置に始まり、予定されていた様々な研究大会等が、中止、延期、またはオンラインによる開催となりました。宮崎県公立小中学校教頭会研究大会も、残念ながら中止という判断をさせていただきましたが、各支会の研究会等もなかなか開催することができない状況であったのではないかと思います。そのような中にも、各支会から「提言発表」や「紙上発表」の原稿をまとめ、集録というかたちで仕上げていただいたことに、改めて感謝いたします。各支会長をはじめ、研究部長や各担当の先生方にも心から御礼申し上げます。今回取りまとめました集録は、学校現場における様々な課題の解決について、各支会で熱心に取り組んでいただいた貴重な実践ですので、ぜひご熟読していただき、今後の参考にしていただければ幸いです。

さて、本年度は第１２期全国統一課題「未来を生きる力を育む　魅力ある学校づくり」（令和２年度～令和４年度）を目標にして取り組む１年目でした。新たな夢を描く想像力と新たな夢を実現する創造力（自ら積極的に未来を切り拓いていこうとする生きる力）を育み、子供たちにとっても、教員にとっても「魅力ある学校づくり」を具現化していくことがテーマの趣旨です。そして、今後も「継続性」「協働性」「関与性」の三本柱を常に研究の中心に置き、学校教育の主人公である子供たちの未来を生きる力の確かな育成を具現化するため、研究を進めていきます。

この新型コロナウイルスによる様々な影響は、令和３年度も続きそうです。コロナ対応に追われながら、大変な日々がまだまだ続くと思いますが、健康管理にはお互いに十分気を付けながら、未来を力強く生きる子供たちのために前を向いて進んでいきましょう。

最後になりましたが、県教頭会の運営等を行うにあたり、県教育委員会、市町村教育委員会連合会、県校長会の温かいご支援・ご指導に心より感謝申し上げます。